

1. オリエンテーション、導入——聖書と聖書学・考古学 4/8
2. 旧約聖書1——宗教史的背景
3. 旧約聖書2——創造 4/22
4. 旧約聖書3——契約 5/13
5. 旧約聖書4——王権 5/20
6. 旧約聖書5——預言 5/27
7. 旧約聖書6——知恵 6/3
8. 新約聖書1——新約聖書学 6/10
9. 新約聖書2——神の国 6/17
10. 新約聖書3——イエスの譬え 6/24
11. 新約聖書4——富 7/1
12. 新約聖書5——国家 7/8
13. 新約聖書6——グノーシス
14. 受講者による研究発表1 7/15
15. 受講者による研究発表2 7/22
16. フィードバック

## <前回>近代聖書学の成立とイエス伝研究

### (1) 近代聖書学とは何か

1. 知・人間的現実の地平としての歴史(歴史化)→歴史主義・歴史的思惟  
倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。
2. 近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想(研究)＝近代聖書学の成立  
近代世界(近代的な日常性)へのキリスト教の適応という歴史的動向において。
3. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学  
言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など
5. パネンベルク  
方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造  
制度的再帰性における歴史学・歴史研究

### (2) イエス研究をめぐって

2. 19世紀におけるイエス伝研究とその挫折(A. シュヴァイツァー)、懐疑主義
3. ブルトマン『イエス』(未来社)  
「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」  
(14)

## 2. 旧約聖書1——宗教史的背景

### (1) 宗教史学派

1. 古代オリエントから地中海世界の宗教史におけるキリスト教
2. 「宗教史学派」(Religionsgeschichtliche Schule): 1880年代の終わりにゲッチンゲン大学の教授アルブレヒト・リッチェル(1822-89)のもとに集まってきた若き学生の間で起こった学的運動。リッチェルに対立して新しい方向を目指して動きだした。その指導者は、アイヒホルン(Albrecht Eichhorn, 1856-1919)。この学派の主要な人物は、  
William Wrede (1859-1906)、Hermann Gunkel (1862-1932)、Johannes Weiss (1863-1914)、Wilhelm Bousset (1865-1920)、Wilhelm Heitmüller (1869-1925)、Heinrich Weinle (1874-1936)、Hugo Gressmann (1877-1927)、Martin Dibelius (1883-1947)、Rudolf Bultmann (1884-1976)  
指導者は、旧約のグンケル、新約のブーセット。神学者トレルチのこの学派に含まれる。
3. J. Weiss, *Die Predigt Jesu vom Reiche Gottes*, 1892.  
W. Wrede, *Das Messiasgeheimnis in den Evangelien*, 1901.

4. 一般向きの学術層冊子の刊行（内国伝道的活動）

『宗教史的国民読本』（Religiösgeschichtliche Volksbücher）、旧約、新約、一般宗教史、教会史、世界観と宗教哲学の5部門＋聖書講解（第6部門）

ブーセット『イエス』、ヴレーデ『パウロ』

5. 聖書の一般的講解シリーズ：

*Schriften des Neuen Testaments, Schriften des Alten Testaments*

6. R.G.G (Die Religion in Geschichte und Gegenwart) の刊行、第一版 1909-13

7. リッチェル学派：救済宗教としてのキリスト教(イエス・キリストの啓示→罪の赦し、神の国→新約聖書。イエスの教えと人格＝キリスト教の福音)、罪の赦し(個人)と神の国(共同体)の二焦点楕円、神の国＝宗教と道德の発展によって地上に実現されるべきもの・人間の道德的努力の必要性。

↓

8. 教會的な枠組みからの脱却、諸宗教や文化の広い文脈から得られた材料と比較し関連づけてキリスト教を研究する。

言語学的・考古学的・比較神話的・比較宗教的方法

ヘレニズム的、東方的な諸宗教との比較：密儀宗教、グルーシス主義

10. 終末論的聖書解釈：ヴァイス

地上的・発展的・道德的秩序に立つ神の国

→ 超越的・奇跡的・突発的な神の一方的な働きによる神の国

11. 文体的・類型論的研究：様式批判、グンケル→ディベリウス、ブルトマン

資料仮説：ヴェルハウゼンの J、E、D、P

二史料仮説

(2) 古代バビロニアの占星術とキリスト教

1. キリスト教における異教的呪術への批判

・アウグスティヌス『神の国』(412年～426年。60歳から73歳)

第5巻第1章から第8章(『神の国(一)』岩波文庫)。双子問題

「人間の意志もまた星の位置の影響を受けるということは不合理である。」

「同一の運星のものにちがった性の双生児が生まれることができた」

「特別の日を選ぶことによって、いわば自分の行為に新しい運をつくるのである」というような愚かな考え方をだれかがまんするであろうか。「なんと類例のない愚かな考え方だろう。」

2. キリスト教の環境としての占星術

◆占星術の学者たちが訪れる

「2:1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、押みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。

・・・」(マタイによる福音書、新共同訳)

3. 宗教と科学・技術の間としての占星術の位置

・古代において、科学・技術、呪術、宗教の三者はいわば未分化であった。

・ユダヤ教とキリスト教では、世界観(運命論的決定論的)としての占星術は批判するが、自然学の一部(後の天文学)としての占星術自体が否定されてはいない。しかし、この占

星術の二つの側面は明確に区別できるわけではなく、占星術は疑惑の目で危険視される傾向にあった。

4. 占星術から天文学、錬金術から化学・医学という展開は、ヨーロッパ文明を理解する鍵となる。

この占星術の起源が、古代メソポタミアの属する古代バビロニアに確認できる。

星神信仰→天体観測の膨大な蓄積→占星術

古代バビロニア→西へ：ヨーロッパへ（西洋占星術）

→東へ：インド、中国、日本

5. 占星術の起源：紀元前 1000 年頃の「カルデア人の知恵」（「カルデア人」自体は、新バビロニア）。

6. 古代世界において。占星術は、先端技術であり、機密保持の対象であった。

占星術は、元来、天変占星術としてはじまる。

支配者は天変占星術の知識を独占しコントロールしようとした。知は力なり。

「天の領域を支配する神々の意志が地上に影響する」

→天上の特異現象（彗星や新星の出現、日食や月食など）を地上の特異現象（政変、王の死や誕生、災害、疫病など）に結びつける。前兆、前触れ。

結びつける原理：照応原理（「上のように下もしかり」）

↓

体系的な世界観としての占星術（宇宙はいわば一つの生きた有機体であり統一的に捉えられる）

↓

7. 天変占星術から宿命占星術（ホロスコープ占星術）へ

規則性を明らかにし、それを過去のデータによって確認する（経験主義）。

cf. 古代日本：中国大陸から伝来した呪禁道、陰陽道、密教は、相互に統合修正されつつ、政治権力による独占を経て民間へと浸透した。

↓

黄道 12 宮における太陽や惑星の位置を記入した表（ホロスコープ）を使用し、個人の運勢を占う。誕生の時間とその時の星座の配置を正確に知るには、かなり精密な天文学的技術が前提となる。

先の双子問題などの疑問に答えるには、高度で複雑な占星術的なテクニックが必要になる。

8. 隠された高度な知識の探求者としての占星術師

呪術師、魔術師、錬金術師は、近代的な科学者、技術者へと受け継がれるが、傍流あるいは抑圧された知識として存続し続けている。

9. 世界において生じる出来事には偶然的なものは一つもなく、すべて他の出来事との連関で生成し、それが起こるにはそれだけの理由が存在する。

科学的な因果的な説明では納得できない人間。

災害や事故に遭遇した人間は科学的な説明以上の説明を求める。

10. 古代から変わらない人間。意味ある世界（意味世界）の中で生きたいという欲求。

### (3) 聖書と古代エジプト

1. ノアの子どもたち：ハムの系譜からエジプトへ cf.セムの系譜からイスラエル  
創世記「9:18 箱舟から出たノアの息子は、セム、ハム、ヤフェトであった。ハムはカナン  
の父である。 19 この三人がノアの息子で、全世界の人々は彼らから出て広がった  
のである。」

「10:6 ハムの子孫は、クシュ、エジプト、プト、カナンであった。7 クシュの子孫はセ  
バ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカであり、ラマの子孫はシェバとデダンであった。8  
クシュにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは地上で最初の勇士となった。9 彼は、  
主の御前に勇敢な狩人であり、「主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ」という言い方  
がある。10 彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべて  
シンアルの地にあった。11 彼はその地方からアッシリアに進み、ニネベ、レホボト・  
イル、カラ、12 レセンを建てた。レセンはニネベとカラとの間にある、非常に大きな  
町であった。13 エジプトにはリディア人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、14  
上エジプト人、カスルヒム人、カフトル人が生まれた。このカフトル人からペリシテ人が  
出た。」



古代エジプトとイスラエルとの関連性  
都市文明の代表としてのエジプトと農耕的イスラエル

2. モーセ伝承と出エジプト：

・ヨセフのエジプト行き（創世記 37 章以降）

出エジプト「1:22 ファラオは全国民に命じた。「生まれた男の子は、一人残らずナイル  
川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。」

2:1 レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。2 彼女は身ごもり、男の子を  
産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。3 しかし、もは  
や隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、そ  
の中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。4 その子の姉が遠くに立っ  
て、どうなることかと様子を見ていると、5 そこへ、ファラオの王女が水浴びをしよう  
と川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠  
を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。

・・・」



モーセの一神教と古代エジプトのアクエンアテン（アメンヘテプ 4 世、在位 BC.1353  
年頃～ 36 年頃）の宗教改革（唯一絶対の神であるアテンのみを礼拝、アテンは創造  
神で太陽神ラーと同一視。宗教的伝統と決別するためにテーベを放棄）との類似性という  
議論。フロイト。

3. イエスの誕生物語とエジプト

マタイ「2:13 占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言っ  
た。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこ  
にとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」14 ヨセフは  
起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、15 ヘロデが死ぬまでそこ  
にいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者  
を通して言われていたことが実現するためであった。

16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。」

↓

エジプトとイエス？

#### 4. 古代エジプト＝古き文明の源泉

古代ギリシャにとってのエジプト。

プラトン『ティマイオス』の「アトランティス島」伝承（エジプトの神官からソロンへ。岩波プラトン全集 12、14-24 頁）。

#### 5. フロイト説と現代聖書学

「フロイトの果敢で天才的な推測にもかかわらず、今日では、アクエンアテンの宗教改革とイスラエルの一神教との直接的関係は、ほとんどのエジプト学者と聖書学者、井すらエス史学者の双方から否定されている。」（山我、45）

出エジプトそのものの史実性は必ずしも否定されないが、「モーセが史実上の人物であることを前提とする考察はあまり大庫なわれなくなっている」。

アクエンアテンの一神教が排他性の強い唯一神教に近いのに対して、初期イスラエルの一神教は拝一神教的であった。これが唯一神教的性格を強めるのは、アクエンアテン時代の 800 年以上も後のこと。

#### 6. 古代メソポタミアとの対比

古代メソポタミアの悲観的文化（ギルガメッシュ叙事詩の死すべき人間と不死の探究、そして挫折。洪水神話）に対して、「全く対称的なのがエジプトの文化である。明るく樂觀的な人生観、調和と均衡のとれた統一体として宇宙を見る安定した世界観」、「四方を外敵から守る自然の要塞」としての「ナイル河流域」、「一貫した王朝の連続性」（大林、26）

ナイルの神々は太陽神と共に自然の神々として親しまれた。

神々（太陽とナイル）の恩恵に生きたエジプト宗教から、現世の死後も永遠に延長されるという期待が生じる。

↓

死者儀礼としてのミイラ

#### 7. 現世と来世の連続性。

「現世の倫理道徳的価値が、死後の運命までも決定すると考え出したのがエジプトであった」「死の道徳化」（29）

#### 8. オシリス崇拝、死者の王としてのオシリス

「死者の魂もまた冥界で審判されると想像された」、「崇拝は、神聖ファラオだけにではなく、いかなる人にも恩恵を広げることになったので、永遠の生命と幸福は正義によって獲得されるべきものと考えられた。」（イオンズ、282）

#### 9. エジプト→古代地中海世界・ギリシャ→ヘレニズム・ユダヤ教→キリスト教

↓

キリスト教、靈魂の不死性と煉獄

#### <参考文献>

1. 中山茂『西洋占星術——科学と魔術のあいだ』講談社現代新書。
2. 矢野道雄『占星術師たちのインド——暦と占いの文化』中公新書。
3. 臼井隆一郎『パンとワインを巡り神話が巡る——古代地中海世界の血と肉』中公新書。

4. 小松和彦『日本の呪い』光文社、『憑霊信仰論』伝統と現代社。
5. 芦名定道『宗教学エッセンス——宗教・呪術・科学』北樹出版。  
第9講「コスモロジーとしての呪術・呪い」
6. 藤原聖子『「聖」概念と近代——批判的比較宗教学に向けて』大正大学出版会。
7. 大林浩『死と永遠の生命——そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社。
8. 山我哲雄『一神教の起源——旧約聖書の「神」はどこから来たのか』筑摩書房。
9. フロイト『モーセと一神教』（フロイト選集8、日本教文社）
10. 上山安敏『宗教と科学——ユダヤ教とキリスト教の間』岩波書店。
11. ヴェロニカ・イオンズ『エジプト神話』青土社。